

教室の言葉

教室は、学習者が言葉を学び、言葉の力をつけるとき、「国語教室」になります。国語教室では、教師は言葉で人とかわります。言葉を教え、学び合う仲間の一人として言葉を使い、つまずいて困っている人に声をかけ、わからないでいると演じて見せてモデルを示し……。いろいろありますが、何よりも

「学び」を創りコーディネートするという大きな仕事をしなければなりません。それは、時と場に応じ、自分に役割を課して使い分けることでもあります。そのときの教師の言葉が、言葉の教室、四次元の世界を創り出すのです。

「むだ」を産まない教室運営

少ない国語の授業です。五十分を確保し、有効に使うために、教室ルールを確立します。その日の授業のなかみ（やること）がわかって、惑わずにすつと学習に入っていけるようにすること。一つは板書で示す。もう一つは「学習の手引き」（学習プリント）を配布する。教師は無言の指示をします。おしゃべり・おこごとは時間のむだです。なびにも一つ。先生のアシスタント＝国語係を

置く。道具の準備、プリントの配布、板書、グループや教室形態の指示など授業前に行い、授業終了後の始末も、責任をもってやっってもらいます。授業日記（授業のレシビをメモする。）をつけることもすすめます。

教室はパブリックスピーキングの場

中学校の国語教室は、大人の、社会に通用する言葉遣いを訓練する場です。教室言葉ではなく、パブリックスピーキングで話す・話し合う場にしたいものです。教室で話す教師の言葉は、話し方も含めて学習者にとっては学習材（教材）です。呼びかけ（

さんと呼ぶ）、あいさつ（依頼や謝礼、謝罪などの型を示す）、スピーチ（一分間スピーチ、一〇〇秒スピーチ、三分間スピーチ）など、モデルを示す必要も生じます。教室内の行動指示、問い、説明、助言などを使い分けることは当然でしょう。

パブリックスピーキングということは、学習者一人一人を大人として遇することなのです。教師がその気持ちをもって接することなくしては、社会に通用する大人の言葉は育ちません。敬語の使い方も教えることの一つです。（大正大学教授）